



東京都市大学で開催された教育改善研究会の報告

～FDワーキンググループ 島田 武 ひと文化系領域

2013年9月9日に東京都市大学で開催された教育改善研究会に参加いたしましたので報告いたします。今回のテーマは「学習に困難を抱えている学生への本学ガイドライン策定のための提案」で、東京都市大学共通教育部の渡辺昭彦先生と稲葉敏雄先生によるプレゼンテーションが行われました。お二人の先生は、発達障害のために、学習生活上・学習上で困難をきたしている学生たちの対応に苦勞をしている東京都市大学の先生方の一助になればとの思いから今回の提案をなされたとのこと。その内容は室蘭工業大学の教員にとっても有用なものであると感じました。以下ではその概要を簡単に報告いたします。

最初に「本学の発達障害・学習障害のある学生の現状を知る」という題名で、発達障害、学習障害に関する簡単な説明と、東京都市大学で実際に教員が体験した例が紹介されました。一例を以下に挙げます。

例：一問一答型の問題には前向きに取り組んでいる勤勉な学生が、論述型の小テストを課された際に、白紙の答案を前に終了時刻が来ても考え込んでいた。事情を聞いてみると、「思ったことや考えたことを書くのが苦手。全く書けない」とのこと。その際に取りつた対応としては、当該学生だけ口頭試問型の試験で代替し、その結果で評価した。

次にガイドライン作成のための具体的な提案がなされました。

今回の提案に至った理由：

高等教育機関での、発達障害を持った学生に対するガイドライン策定の研究は、ASD(=アスペルガー障害)やADHD(=注意欠陥/多動性障害)を中心とした障害のタイプ別対応が中心でガイドラインも、ASDやADHDが原因によって引き起こされる社会生活上の困難を克服することに焦点が置かれていた。しかしタイプ別のガイドラインの有効性は、現実との対応では限界がある事が明らかになりつつある。一方近年は障害のタイプを意識せずに、大学生活の困難を克服するためのニーズに焦点を当てた対応の研究が進み始めている。学習に困難を感じている学生の「分かりたい、研究を進めたい」というニーズは切実であり、同時に「基礎学力を付けさせたい、研究能力を身につけさせたい」という教師側の強烈なデマンドもある。これら学生側のニーズと教師側のデマン

ドの出会いを保証するガイドラインづくりが必要となる。以上のことから東京都市大学の「発達障害のある学生を支援するためのガイドライン」の方向性は以下のようになる。

1. 大学は本来、一定の学力水準に学生を到達させることを任務としている。したがって、その初期の対応(対策)はニーズから抽出される学習上の障害に焦点を絞ったものにする。
2. ASDやADHDによって引き起こされるであろう障害への対応は、既存の高等教育用に用意されたガイドラインの利用を考える。従って、ASDやADHDについては、ガイドライン策定の当面の積極的目標とはしない。尚、本学独自の対応策が見いだされた場合はこの限りではない。

具体的な提案：

データを取りながら実態を調べ、同時にできることから具体的な対応をしていくためA、Bの2段階に分けて試行をしていく。

A段階：具体的に実践的に初歩的対策を取ると同時にデータを取り始める。この段階ではスタッフの習熟も視野に入る。(例：ポータルサイトに「学習上で困っていること」などの名称でアンケートを取り、実態を明らかにする。アンケートは2種類。本人用(本人が記載するアンケート)と友達用(友人から見て困っていそうな学生の相談)。

B段階：引き続き初歩的対応をしながら本格的にデータを取り始め、それをベースにして本学で必要な対応と組織とを明らかにする作業に入る。(例：新入学生と保護者に対して「学習上困っていること(配慮して欲しいこと)」に焦点を当てたアンケートを実施する。教員側からもアンケートをとり、直面している困難な場面を明らかにし、具体的な対応を探る。)

以上の他にも具体性に富んだ提案がなされ、質疑も活発に行われました。研究会全体を通して、参考になる点がたくさんあり、大変勉強になりました。

第10回室蘭工業大学教育ワークショップ

テーマ「教職員のコミュニケーションの活性化」

～FDワーキンググループ

平成25年8月21日（水）～22日（木）に、洞爺湖畔（洞爺サンパレス）にて室蘭工業大学教育ワークショップ（FDWS）が、新任教員10名、各コースから7名、東京都市大学から1名、事務職員7名の受講者とスタッフ（学長、教員タスクフォース（TF）6名、事務職員タスクフォース1名）の参加を得て実施されました。今回のFDWSでは、初めて事務職員がグループメンバーとして参加し、教員、事務職員が連携して学務を効果的に行うことの可能性について議論しました。学長から挨拶をいただいた後、活発な話し合いが行われました。今回はその内容を少し詳しく報告いたします。

アイスブレイキング

同じ大学に務めているものの、領域や部局が異なると顔と名前が一致しないことは多々あります。分野の異なる教職員がお互いに顔見知りとなり、互いの緊張感をときほぐすとともに距離感を縮めること、さらに、グループワークの基盤となる連帯感を醸成することを目的にアイスブレイキングを実施しました。

本年度も昨年度に引き続き、二つのステージで構成しました。最初は、昨年度も実施した「動作の足し算」です。全員が顔が見えるようにグループごとに円陣を作り、時計回りに自分までの名前を発声するゲームです。一巡した後は、各自オリジナルな任意の動作を加えてもう一度行いました。メンバーの顔と名前を覚えるには最適なゲームの一つといえるでしょう。その後、「フラフープゲーム」に挑戦しました。これは、グループごとに輪になり、メンバーそれぞれが指1本でフラフープを支えながら回転させるゲームです。1分間に何回できるかを競いあいました。このとき指がフラフープから離れないように、フラフープが傾かないようにお互いに協力し、より速く回転させようとする中でグループの一体感や団結心を高めました。

つづいて第二ステージとして、グループ毎にグループ名とフラッグ（旗）を考案しました。その後、作成したフラッグを持ってステージに上がり、グループ名称の由来やフラッグを互いに紹介しました。アイスブレイキングを通して、グループ内の意思疎通を図り、メンバー間の親近感を抱くことができたと考えています。



第1班：フルムーンズ



第2班：SYNERGY

WS1「問題点の明確化と共有」

WS1では、教職員で連携して対処すべき問題点を明確化して、グループの各メンバー同士で問題点を共有し、その中から教職員が連携することで問題解決に効果があると考えられる例を以下の手順で抽出しました。



佐藤学長の挨拶

(1) 最初に、各グループには、学生アンケートの自由記述欄に書かれた意見を名刺大のカードに印刷したものが渡され、そのカードを一枚づつ参照しながら、教職員の連携によってより効果的な対処が行える事例とそれ以外の事例に分類する。

(2) 次に教職員で連携して対処すべき例を、各メンバーの経験を元に(1)に追加する。

(3) 次はそれらを原因別、緊急度別、重要度別、対応部署別などの対応の基準を元に事例を再分類する。

(4) 次に(3)で分類したものの中から教職員が連携して対応することで問題解決に効果があると考えられる事例を複数抽出する。

上記(1)と(2)では個別の具体的な事例に焦点を当て、それらに効率的に対応する際の教職員連携を検討しました。(3)では教職員連携とは別の観点を導入することによって、事例間の関連性、非関連性が明確となりました。(4)で抽出した事例に関してはWS2で具体的な対策、解決方法を探りました。

最後に各グループによって以下のような結論が導かれ、発表が行われ、質疑を通して意見交換が活発に行われました。

「GEKOKU」

就職活動のサポート（キャリアサポートセンターと就職係）、単位（教務Gと学科・各教員）

「SYNERGY」

意欲ある学生への対応（教員のアドバイス機能強化、窓口職員の相談対応強化、情報共有）

「カオス」

授業、科目間の連携、施設（機材、図書館など）、授業システム（能力別、少人数クラス運営）

「フルムーンズ」

教育の連続性・連携（教育内容（科目間）の連続性、学生の達成度の把握の連続性）

WS2「教職員連携による問題対応と解決の模索」

WS2においては「教職員連携による問題対応と解決の模索」と題して、WS1にて行ったアンケート事例の分類・分析を元に行われました。WS1では、配られた学生アンケートの内容としては、授業実施そのものに対応するもの、教室環境や利用に対応するもの、大学会館など施設利用など多岐にわたり、各グループは指摘の経緯や背景を検討しました。WS2では、取り上げた事例に対して、教員と事務との連携による対応と解決法の提案が課題となりました。もちろん一般論として大学で実



第3班：カオス



第4班：GEKOKU

現できることは限られていますが、本WSのテーマにもあるように、現時点における教職員の相互協力による解決を模索することを狙いとしてきました。つまり、現実にかかる問題について、部署を跨いで迅速に対応解決する柔軟さが求められています。

各グループは、大学の限りある予算、施設、人員リソースの中で、学生の声に応える施策を熱心に議論していました。たとえばグループ2においては、授業受講で例えば早くから専門的な授業実施の希望、あるいは多種多様に学びたいなど、大学での学びに意欲的な学生の声に対して通じるような施策を提案していました。授業内容の作成については教員が対応するが、系学科の枠や本学の教室設備環境という条件のなかで、学生要望に応える授業履修の場の設定には、長年の教務経験がある事務職員の役割は重要となります。意欲ある学生の声に応じていくことは、大学院改組を予定している本学の大学院教育の発展への足掛かりにもなることから重要な対応策と言えます。別な対応策として、学生からの卒業までの単位計算の複雑さに対する改善の必要性に関わる発表として、グループ3からは学生の単位状況を把握できる情報システムの整備などが指摘されました。これは正に教務と教員の相互協力が必要となる対応策です。

今回のWSのテーマは、SD (Staff Development) を取り込んだ内容でした。データ分析が主であったWS1から、WS2に移行し各グループで教員事務職員が一緒になって中身を議論しグループの一体感が増している様子は、本WSのタスクフォースから見ても、本学における教員と事務職員、つまり教職員の共働の姿を表していると感じられました。

WS 3「教職員のコミュニケーションの活性化のために」

WS1～2をとおして「教職員の相互連携」を活発にすることで、効率よく円滑に問題解決できるケースがあることが明らかになりました。WS3では、それらをまとめて、ロールプレイしました。事例を効果的に解決するために、教職員の連携体制の構築に必要な相互コミュニケーションを円滑に行うために心掛けることや工夫すべき点は何かなどのアイデアをグループ内で出し合い共有しました。

具体的には、①教員から事務職員への協力依頼、②学生の相談に対する回答、③FD・SD研究会における協育支援ガイドの3つのシチュエーションから各グループで選び、教職員間のコミュニケーションを意識した架空のシナリオをグループ内で話し合い、ロールプレイを行いました。

グループ1 (フルムーンズ) からは、教員が関連科目の達成度を把握するための、成績のグラフなどによる「見える化」する「新教務システム説明会」で、事務職員が説明し、教員と学生からの意見を出し、より良いシステムを構築・活用して連続性のある教育を達成していく取り組みが提案されました。

グループ2 (SYNERGY) では、経済的困難に直面した学生が就学を継続するために、チューター教員と学生担当事務職員、学生と父親が連携して取り組み、解決策を見出していくストーリーが発表されました。

グループ3 (カオス) からは、文系就職を希望する学生の就職活動を、研究指導教員、就職担当教員、キャリアサポートセンター職員、文系教員が情報を共有しながらサポートしていくことで学生の就職意欲を向上させるとともに人格形成をしていくサクセスストーリーが発表されました。

グループ4 (GEKOKU) からは、学生から要望があった、一人一人が授業に取り組める効果的な授業を実践するために、教員間で少人数教育が提案されました。そのために必要な教室構造改善に向けて、事務職員と連携して取り組んでいくストーリーが発表されました。

いずれのグループのロールプレイも現実に発生しうる問題点を、学生、教員、事務職員が連携して共に解決していく素晴らしい提案がなされました。今後の学生教育のためにも、これまで実現が困難であると思われてきた問題も教職員間で連携することにより解決の糸口が見つかるかもしれないと思われました。

事前および事後アンケート

参加者には、実施前ならびに実施後に無記名形式のアンケートの提出を依頼しました。前者の設問は、i) 教職員が担う教育や教育支援連携に関する考え (問題点、解決策、活性化のアイデア、取り組みの成功例、実際の失敗例、関連の事例、前任地における経験、今後の抱負など)、ii) 教職員に求められるコミュニケーションや連携に関する考え、iii) 新任教職員が本学における教育活動を始める上でのアドバイス (あるいは本学で教育活動を始める上での不安なことなど)、iv) ワークショップに参加する意気込み、v) その他、教育に関する自由意見でした。貴重なコメントが多数寄せられ、TFは当日の対応等に考慮しました (例えば、iv) の回答：積極的に参加1名、普通に参加16名)。後者の設問は、1) 今回のテーマに関する感想、2) 他学科等の教員や事務系職員とのコミュニケーションや連携の可否、3) 他の参加者からの教育に関する刺激や情報の取得状況、4) 本ワークショップの評価、5) 改善すべき点、TFや担当者に対する要望・意見、6) 本ワークショップで得た成果や今後の実践に取り入れたい点、7) 教育活動や教育支援等に対する気持ちなどでした。テーマ設定の不十分さやスケジュールの改善などに対する意見がありましたが、総じて、参加者の教育に対する情熱や関心の強さならびに満足度の高さが伺われる結果となりました (4の回答：とても役立つ8名、まあ有意義だった7名、楽しかった10名、充実していた10名等)。



ワークショップ参加者

英語授業の授業参加と授業参観を 題材とした討論会

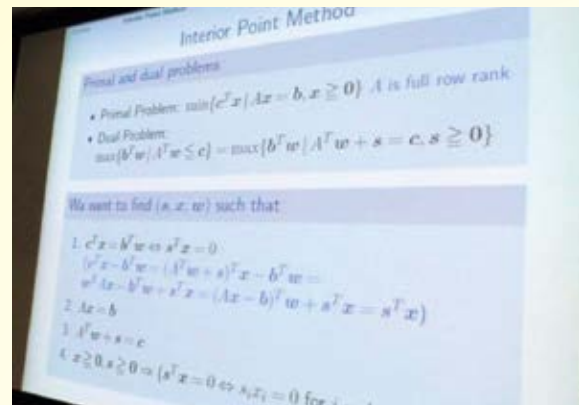
～FDワーキンググループ
塩谷 浩之 しくみ情報系領域

本学の教育システム委員会の中のワーキンググループ(WG)一つであるFDWGと特別委員会として位置付けられたFD研究会は、全学的なFDを課題としています。本授業見学は、英語で実施教育に関連した任を担っている英語教育WGとFD研究会の合同企画として、英語で行われる大学院授業を対象に行われました。授業科目は情報数理工学特論Aであり、今年度は集中講義にて実施されました。講師は平成24年度まで本学におられ4月から東京理科大学に移られたご存じ 施 建明 先生です。本授業科目は、情報工学・科学における数理を対象とした内容で、施先生のご専門は数理最適化であるので、最適化の基礎と応用を院レベルで学べる良い機会です。

授業見学会は、本授業の集中講義の期間中の9月3日3-4講目に行われました。履修者数は11名で情報電子工学系専攻情報システム学、コンピュータ知能学コースの学生で構成されています。内容は、単体法・内点法の主として扱っています。授業においては、全て英語で説明、スライドも英語記述されていました。授業見学へは、FD研究会メンバー、英語教育WGのメンバーの中から合わせて9名が参加しました。授業においては流暢な英語で話す施先生に、学生は若干の緊張感に包まれていました。学生からは、本講師は学部で教わったことのある先生で、特に平成24年度後期には施先生に技術英語を教わっていることで、学生は英語を受け入れる覚悟をして臨んでいる様子でした。授業では、講師から最適化問題の基本から丁寧に説明され、口頭の英語のみで理解するのはなく、スライドには(写真参考)式が整然と並んでおり、学生は持ち前の数学の知識と聞き取れる断片を一生懸命つかもうとしている様子でした。

今回は授業後に、見学者と施先生を交えて大学院授業での英語導入について議論する時間を設けました。施先生からは、授業内容の理解を優先させたいのであれば、英語中心では難しいとコメントされました。今回の授業科目は英語での討論が含まれる内容ではないので、論理的に展開する授業コンテンツを下地に、それをトレースするように順序立てて英語で表現するので、逆に、英語のための英語の内容よりは英語を取り入れやすい授業内

容であるとも云えます。参観者からは、事前資料を充実させて内容理解不足を事前の準備で補うなどなど、見学者・講師含め様々な意見が出され、今後の英語導入につながる見学企画となりました。



本の紹介

「教師 花伝書」

佐藤学(東京大学、教育学) 著 小学館

教師は職人と専門家という両面があります。職人としての教師の世界は「熟達した技能」「経験」「勘やコツ」によって構成され「模倣」と「修練」で学びます。見方を変えて専門家としては、それは「専門的知識」「技術」「思考と探究」によって構成され、「省察」と「研究」によって学びます。たとえば教え方は、スキルの修得だけではなく、「身の構え方」でもあります。教室の「息づかい」を感じ、言葉を選んでいるかなどを考えているのでしょうか。昨今の大学FDは初等、中等教育を追随しており、学ぶことは多い。それは、教師が「教える専門家」から「学びの専門家」に変革しているからです。

「行動科学を使ってできる人が育つ！教える技術」

石田淳著 かんき出版

ページをめくっていくうちに「なぜこの本がもっと早く世に出なかったのか」と思いました。多くの教員は、研究生活を「熱意、努力、根性、忍耐」などで過ごしてきており、学生指導においても、それらを拭い去れないものがありました。そのため「残念な学生」と学生のせいにするこもあったのではないのでしょうか。ところが、行動科学から見れば、それらは「できる学生」に育てられるはずの指導者の問題だったのです。

編集後記

社会の変化に伴って、教育の仕方も変化していきます。FD活動はそのような変化を教職員の皆様に伝えていくことも重要な使命の一つです。困難を抱えた学生が学習するための環境づくり、国際化を意識した授業改善などに対してどう取り組むのか。教職員が一体となって解決することは今後益々増えていきそうです。